詞のゝ海の

二

ホ 2
5407
2

門 本2
號 5407
卷 2

昭和36年1月9日 寄贈
平野金之助氏

36. 604

早稲田大学図書

詞環輪二之巻

為ひとり上へうらうてふをは

左

左八 よもふのをちひやうろうん」をちこちのうきとくもいろいろ亦

同十二 序 いづさ弓ゆきだ年もろとぐしようふりてそまされ」をのうろ

同二十 いふをうより紅葉ちらもばうねのゆふしげぞ明ある」ひ後

後十 うもかくもいふをれ菜のうしなるあいづくハ」春のゆくをどろ

後拾四 いきやうう」川風の春はしゆしぐれをちう方人の袖のうゆう

拾十六 をれをもふうらくくうれどあうう」よふ春せきこ人のあふ

古八 ちをや世う秋代もきうど」をこ四川」かうくをるゆふあうをう

錦華堂

同十八　ゆびきや　をとこたちとうれしおもふ　へ〜ゐるかぎりこたいぐりせんと。　て

ぞ

古二　のうりみくちうぞをぞこたい　ちうちひをてよの中をしうれ　ぞ

同六　山里をみぞさびしさまさりける　人めとまもうれなしこゝへ　ぞ

同十一　かうこもとはゆびみぢまそてこぞこゝやこ　妹ちうこゝやこ　人つげぞ　ぞ

同十二　あろうたうる後ぞ神ゝ　をとなるを　あゝをせたわへぞ後つせるれ　ぞ

此うのまを永後をせきゐへぞ後つ眼みをばををふくうぶをぞ神ゝ
をみををおどをあろうろうるおうぐぞといてうり

後六　秋萩をみどうる風をふきぬうをとをかをとぐ　萩ちうね　ぞ

後拾十六　いふせん　山のうちみぐぶうぐまゝでちうる月をふ出ん月を　ぞ

きゝばゝふありよ八上へゝてゝぐる拾ゐう。三のをものだの紀ゝ出せを。

も

拾十八　をばゝうくゆきてかくゝん　ちうふてをうちうの雪をみゝうを　も

同八　大井川　ゐの雪を雪ゐおうゝ　かくふみゆきやゐを　も

後拾六　ゐ柴ちう家をきくゝうくゝぞるき　時雨をうをとうれせぬよ　も

金八　ゐうゝうりや　おりひうくぶの山ざくゝ　ちひまをゐをめづる　も

秋六　をを紙あきをまぐれ時雨ゝ　ひゝをたへざりうみ　老乃風　も

後十六　ゐうゝ　ぶきを山ゝ　かひをちをしのちじみ　人を朽ゐうこ　も

新十七　むくやうををこをの衣ゝ　くぐべんよ　いづをう家のおきまをうこ　も

同四　秋をてく　ものをゝそ思へ　歳ゝふ萩の上ふく風ふつけて　も

後拾十　をうれをんちうをくゝて後川　おりひをうみ　こぞのゐふを　も

同九 おぼつかな。みやこのそらやいかならん「こよひ明石の月をみるにも

を

古一 わかれしくとふめてまかりつる「あかなくに立かへりなん山のはゝを

後十一 こまちえよ「人もすさめぬこひをして袖を涙にながすもぬるを

拾十三 あしやきみ。あしかりけりといふつゝかなん「よがかくばかりかりふこゝろを

金七 よろしくともにおもひちるこゝろもがまらうらんせがや「人に「よはのきゝを

ものをといふ事はおほくは上へかへれど。又拙きのことのをと

ほど。かくつゝは別に五の書きをの紹にし出せり

に

古二 花のいろはうつりにけりな「いたづらにわが身よにふるながめせしまに

同廿 春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる「秋霧の上に

同十五 そまをとぶおりたてゝてまがやどを見きまつ比を「人のさかくに

拾十二 あきなのしまり川。上の山乃をつゞら文なる人もみしぬをこるに

此あハ文なる人も見しぬるにふる。あきなのまる川といふこゝろなるを。くるの錦はまつらをいふんぞ。ならさの山のとひろけるなり

後拾十八 錦ぬるをむ秋。錦ぬるなのいろく立ぬをば猶太さしのいはじや「よに

同 わけつ「あらちものむをもんさしびにのる松乃こずゑに

みるふるしにふこおもしはおほくはかゝつぞ

て

古二 この里にたびねしぬべし「さくら花ちりのまがひに家路わすれて

同十七 わがこゝろなぐさめかねつ「さらしなやをばすて山にてる月を見て

同十一　夕雲雀　雲はたちそそふ　初ぞ見ふ　行まつ元ゑ人をこふと　て

秋十八　あかりと乃秋の初ざくんのもきあと　元をそいの〻　才を見ふと　て

拾八　そ〻かゝぬ金やさ〻にのびゆ〻ん　きりはりぶり見ひらのべふ　て

金三　美代子　ゑを見るべき　たゑぞこの行合の元ぼ雲のくふ　て

秋十七　よの中波ちるぶくとい見ふゑ　ふぐは畑を才のかひふ　て

古元　るゑ川　稀たりかく　神元月　ゑぐきのゑをたてゆきふ　て

後十八　なふぜんゑへさのゑゆをおりひりむ　おきろゑとをかづくふ　て

同十八　ゆりとき〻ゑねの山は行そぎ行ゆ〻ん　ゆく新八ふ　て

拾二　ゆふ見ぼ見はゑてゑも行りゆ見　あやゑの夢のゆりのゑふ　て

同三　夕雲雀　こむ見もゑしぞ　くんせむへおのゆゑのゑぐりふ　て

ふての夢りふて上へゆつゝ見上にゑをふくゑて　ひゆ見ゑて

ふゑしゆりゆ次ゑ行く

古十八　月やゆゑゑやむゝは春ゆゝゑ見ゑゑ不の才ふ　て

同　ゝゝみてゑなんてもいゑん　ゆゝんゆゝゑき後ふ見ゆゝ新ゆ行ふ　て

同十九　ひゑをのゝ見ふていゑぐゆゝ　ゆゝべき後いでやゝゆゝゑ大ゆゑふ　て

秋勅撰　乃十二　いせのあ乃は新ゆ夕ゆふゆづくてふゆゝびの見はゆゝおりひふ　て

玉四　牛麦秀花　那ふゝゑく秋ゆゝゑ見ば見ゑ見はあふよ後ゝれゑまゝち　て

同十六　武蔵国秩父　日が宮ゑ後ゆ乃本ゆりゆく　ひゝりのゑぐく　ゑふ行ぐかりふ　て

で

五十六　いゑゝへゆゆゆ不ゑゆゝゆゝ　ゆひ行ゑゆふ　ゆゑすれせ　で

新一 〽ちりのこるみぞがれてちりぬる〽梅花たちよりぬる人をこひこ　で

文上へをかつらびきをふくめてでと結びたるハ

千十四 こゝれても恥ぢありけるをもづきをめぐらむぞらにもおりせ　で

と

古一 うぐひすの笠にぬふてふ梅の花をりてかざさん〽老かくるや。　と

同九 名にしおはゞいざこととはん〽みやこ鳥わが思ふ人はありやなしや。　と

同十七 かゞみ山いざたちよりて見てゆかむ〽年へぬる身はおいやしぬる　と

拾六 たよりあらばいかでみやこへつげやらん〽けふ白川乃関ハこえぬ　と

同十八 はるかなる人にかゝるらん〽ちきりの枝みちて一束あまりき　と

後拾一 ぬるきへゆく人あらばつげてん〽けふうぐひすの初音きゝつ　と

ど

古四 〽月見ればちゞにものこそかなしけれ〽わが身ひとつの秋にはあらねど　ど

後撰二 いましはへも花すきむをうぐひす〽ましなる香ハなけれど　ど

ども

後十五 須磨のあまのしほやき衣〽浦とはなき人のいつかはかれせられ　ども

新十八 〽世をいとふこゝろも捨ぞありける〽うきをうしとは思ひしれども　ども

とも

古四 〽萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかん〽さよハふくとも　とも

同九 〽君が代ハかぎりもあらじ〽長浜の真砂の数ハよみつくすとも　とも

べく

古八　山風にちらす吹まれみだるるん／それのまぎれぬ思ひかな　べく

同六　花のつゆを吉野まで／てそしどたうとぶ／かへ／人のちる　べく

まで

後八　ゆすりるよ／ほどハをのふうりぬとも／ひ月はめうりうふ　まで

同十一　あぶまどく／ふり／ひふり／つがあひをあやふとむとのうふ　まで

又上へをかつるぎ下にをかふをそまでとはびくるハ

古七　つぐ志をる代ゝハる代ゝさぐ見のいとをとぬて苦のむさと　まで

千六　をを重ては一よ二よ／ほ／むぐ／はは第しかはは春乃ろうせき　まで

ながら

古又　ゆゝしなてさらゝあやとりん／りみぢだのふうりせるとえ　ぐら

千十九　おどろ為ぬがちろろこそうろれ／ろうあき世をバ美ゝくえ　ぐら

古三　かゝくぎとあぐ行く置はわまくうをバ猫うとまれぬ／かりふ　りのうゝ

同十九　つるぐをはよ／ぬをうと人のうりゆくう／ちをふをハうゆう　りのうゝ

りのゆを

同四　秋あゝでつるをゝかをきゝ女和花／をの川ふりあひぬ。　りのゆを

同十二　志をを純だ春月を新とぬりうを／ろうを人ををハぬ。　りのゆを

まふく

同八　をうををば山のさくゝみををてん／をめむをを見ぐハ花の　まふく

同九　ひくゆびをぬさををろう行（ぎをを白）／ひ紅葉のちゝき紅の　まふく

格上へかゝる留りの格ハ疑ひ餘情の通ひあり。准へしるべし

○上へかゝるてにをはの歸する留りて。上へかゝることの言ハいかにもみな
その留りてにをはのかゝれる上の詞の切る所よりへかゝるやうによむ
べし。又は何ぞかゝる詞を考ふべし。且し『の字よりしるしたる所へ
入るべし。』は結の切るゝ所ある所なり。故に後世ハ此格をしらずで。
留りけるてにをはの或は独自の詞などへのかゝりてあらし。其詞の切る所さへ
をかからぬ事あるなり。みなまがふべし。もし先の詞へもかからぬを離
ようにし。しかし切る所までへかゝらざれば。一首の難きのそしりをしるべし。

詞あるてにをはの格

[も][と][ぞ][の][や][何][こそ]と言ひかゝるつゞきあり。其内[も][と]ハ
略く。[ぞ][の][や][何][こそ]を言ひかゝる詞に言はれたるの格によりて結ぶべし。

古四　おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲きく時[ぞ]秋はかな[しき]。

同二　さくら花とくちりぬともおもほえず人のこゝろ[ぞ]風も吹あへ[ぬ]。

後拾一　逢坂の関をや春もこえつらん音羽の山[の]けふハかすめ[る]。

古六　みよし野ゝ山の白雪ふみわけて入にし人[の]おとづれもせ[ぬ]。

同二　こまなべていざ見にゆかん故郷ハ雪とのみ[こそ]花もちる[らめ]。

同十五　人をおもふこゝろは木の葉にあらば[こそ]風のまにまにちりもみだれ[め]。

[や][何]などゝも伴の詞どもにまぎらはざるやう心得べし

ぞ や 何 こそ はるがひかすみたる例う

のもやゝ霧きれかすみ ぞ や 何 こそ と をるる事はもし こそ よをちる

ときハ こそ の結ぶ結ぶ

後十一 はのおちなかたくまくをみ こそ をとたく火の下にもゆる ると

あるどのゝ〜。なれ三の巻ののの終り〜くをくいつる

○二をふくのふるをふをを

ぞ と や と

後十一 花の色をいろぞとわれ後を ぞ 春 や ①み ①。人のそぐ むる

ぞ と 何 と

結云 いのちを ぞ いろ ある ん ①。ハ ひこ ① いきてあるくよふこそをきれ

詩柴六 後村上院 紅こちる雲秋の月 ぞ 結をおきて ぬる こそ あ き ①。とやけうり ける

や と 何 と

詩二八 うをぐるに人のをぐくにうゝび出てちうぐ や たと を又ちづむ べき

こそ と や と

中務集 花を こそ 人 や を る ①。てとゞめ ゝる 散ぬるぬ身をいふらをせん

花の方を二をふくのへをるてふをはるゝこと ゝ のをを

をゝてちうぐ〜

宗祇抄 宗長著 ゆゝ古やををの〜後を月新 ぞ むゝ ① ん き ①。ひひゆゝ ゐく

こをと同じく二ををるを

變格

これハ上にそのや何等の辞をうけて。ぬるつるあるけるせるらくと
ぬね志らなどゝ結ひて。定まる格ともたがひて。ふとそを不調とハ
聞ゆる歌を。今かりに変格となづけてこゝに出せり。

ぬる

後一 ふる雪はみのしろごろもうちきつゝ春きにけりとおどろかれ ぬる

同十五 数ならぬ身を宇治山[illegible]なげきを思ひこり ぬる

拾十一 みなといづる方はそがのいはねハかなしき物と思ひ志 ぬる

同十六 生ふの戸をさゝぢやたてゝつる[illegible]うぢひものまゝ川にあせてあさ[illegible] ぬる

千三 さよ夜は花とみすまちて秋風をまつ川の瀬にはへハくれ ぬる

同八 うき本ふく河づらの松をうれふて難波乃うら波たゝざりけり ぬる

新八 あしよしおもひしとみではあるらしを河されとばかりひてやこ ぬる

同十 あめ時ならみるをを波そまだ河く名草は浜をあそび ぬる

同十二 みるめこそ入ぬるいその草ならし先袖さへ波の下にくち ぬる

同十八 うれしづゝあらしよハさてもいふぞとんけりかひてこゝろへうち ぬる

同 たのめや月行かはりてのかきたる子をあるふ往まよひ ぬる

同 うき身をは山田のおしぞしこめてよきをひきかくれ恨あそび ぬる

つる

拾十五 かしはなるつくまの杵の宿くどとあやしむなつにふゆを清み つる

後拾七　ほゝが家にて花をのこすまでとうつし植て春のゝきぬ世べとは　つる

同七　八重菊にて酒をおきそへて九ふまでうつろふ　つる

金九　春の風ふるぬるゆゑさびけり社の宮ちしてて　つる

千又　ちくさみやゝ〳〵ゝ行ゝ根の山あつ〳〵にお笠と海乃和とあ　つる

同六　やうとをけまゝ〳〵ろめ〳〵波引をあてゝうのうぐちをうり　つる

新九　ちるぐ〳〵と思ひなくべきちゝ波をうやゝやうる神ふうを　つる

なる

古十又　ちひふあひて和おりふうのとが神ふやどる月さへぬゝぐや　なる

玉十　こひゝびて春とあぐひる夕昔西ちゝれど人乃ゝとがや　なる

実家

ける

後拾八　春ゝ花秋ゝ月ゝ舞ゝてゝ手ふをうゝ花ゝおりそざり　ける

新十七　波ノの翼美をうゝやさぬ法の義おもひもよゝで宮をうゝ　ける

後拾十三　ちゝ老ゝよゝとうゝやゝうゝ花ゝ少ゝ行ゝ行ゝつきゝで人をこひ　ける

実家

せる

後十四　ゑゝびしの山路をゝゝ作ゝよ天てこの未ゝゝふ和歌てゝ　せる

実家

る

同八　ちゝゝやゝゝゝゝゝ玉乃をゝゝん三ゝゝ後ゝ忠ゝバ為てみゝ　る

新又　秋のよハゝゝや出月ゝ中ゝりおゝとゝゝりゝゝや三ゝ様ゝ世ゝ　る

ぬ

源氏　いゝゝへを吹ゝてゝへゝゝ笛行ゝゝさへゝゝ中ゝ考ゝさへゝゝ　ぬ

新十五
うきは恋しき物の袖ぞめて見ばや思ふ人にぞおもはずもせ　ぬ

同十七
春は日の影なるは浪に船と見ていは川さら橋とも〈どちらへ〉　ぬ

上件の歌どもいづれも皆終りの句に歎息のことばありて。第四の
下に。□文よりかどといふ辞を加へて聞えたり。この格に定まれば
おくく。ぬつなりけりせすぞ不ぞなどく結びてはかなりてよろ
しかれば。よく味ひみるべし。

源氏
若菜上
いかなる山ふかれさとをばなみだてまぐえの袖にぬるまどひ　ぬる
此歌にづきつる詞に。よとこうむるとよしといふことまでに
ぬるよしといふことあれど。しかしてにくきも皆へあるべし。

後拾
三
いかならん世にうしのみそしとこ友はわかきさぶ家のおりげなり　つる

此歌は上よのとあれば変格にはなりぎるをつるの下へのぞといふ辞を
くえへてみるべし

新後撰八
くるゝ影さかしべひとうちなん□いつかは川いそぐ流らに船をかし　つる

続拾一
よくぬらしも氷ますき見ゆや□けらくもぬその袂干霜てかゝる　る
此二首は第四句の下へをのといふ辞を加へて上へうつるべし

○すべて変格は。其の乃なる味のあるものにて。その味をしんずしよ
くさとりえらる諸体のうへにそぶさいと稀なることにて。八代集は
井にも三つふたつ。三十首にみるさまど。八代集の歌の作者にいたる変格のたぐひよくなる歌おほかれば。撰集には入ていとよく
まらを
ありへはのそみがらにはよむまじきことを知るべし。総るに後世にそ。
てにをその定まれる格あることをふかくしらねぞまして其の味などを
ぞ誤りとられまへぞして。此変格のなるひあるをみずかによむてく

と聞ゆらんあはれん人をおもふ尽きせぬぞ。

○又一くさ

後十一　恋しきをたれにひとめて有物を人にしられぬなみだ　あふ　あはぬ

同十二　おもひ出てなづましければ山者の古さへにこころねたかる　あふ　あはぬ

うきぐもの日記　はるかなるしききえんとてつる故ようも見ずのめぐるる花ハ　あふ　あはぬ

同　たく山の思ひやるべきかならし袖にまさに何者のかくる　あふ　あはぬ

うつほ蔵開　一よぶに久しくふなる何しらずのまふく見ゆる夕暮　あふ　あはぬ

同　かへるをたちなにしてけるなの袖こそわけつるこよひ　あふ　あはぬ

にしきのむしろ　清く緑の葉まで浮く流何を挑も上なになるハ　あふ　あはぬ

後十一　船こぐ川なげきを緑ざゑも何る物をたゞふぞらうりの袖や。　あふ　あはぬ

拾十七 春く　梅をみる花ちらしをぞ清く見のをます川波も高き影や。　あふ　あはぬ

同十八　かへるさをたつよりなる名なくて家袖ぬるまでのや。　あふ　あはぬ

後拾十　うれしき状をたまし人をみな物を清くきをこす影や。　あふ　あはぬ

同　須戸の何る徒浦こで松のあれと友くえぬ人なる我や。　あふ　あはぬ

詞十　変のうへを月にをさや水さえ波まさるこそる物や。　あふ　あはぬ

六帖　ふくしなく船ぎくる船乃てる日水を思ひとまなる影や。　あふ　あはぬ

同　清みよう香秋のゆ宿徒をびしきハいとど庵の風や。　あふ　あはぬ

蜻蛉日記　いふよりをきくぞうる浮島のよみゆるさるの人や。　あふ　あはぬ

うつほ祭の使　久されたまろね高る身徒をびしきに明るぞらしの影や。　あふ　あはぬ

同 玉ゆづり　何るとのとえゆる緑ざゑのひびきに独あるこころの美や。　あふ　あはぬ

風雅 古今集 いろ見ぬ松と [あふ] [あふと]〓萬代としらぬ花ぞちるかな花もさらまし ぞ

六帖 寂 よの人乃いをろりのをこぐさ見ふあしといえぬハ [たま] ゟうき [あると]

源氏 玉ノ子下 おきてゆく見もきつきぬ明がまふ [いづく] の森のかくふそぞ [あると]

後七 見こゆるおこぐふゆるくこが紐く秋の紅葉く [いづれ] まさ [まさると] るイ

同九 くやくくとまれ夕暮く空ハ見てゟ夏何しさと [いづれ] まさ [まさると] るイ

後拾十又 よゟゟよ秋月くこが身秋りまとおぶつゟあさま と [いづれ] まさ [まさると] るイ

同三 きまがさのまちつる秋のきしさく何為されと [いづれ] まさ [まさると] るイ

新拾 集 ゟろへろんこがあろとでと秋萩の花のいろとハ [いづれ] まさ [まさると]

好忠 集 夜さへ紀乃森秋をぐしと何ぶ人のむがさと [いづれ] まさ [まさると]

赤染 集 秋をてくいすハさゟり秋のみちぞとゟろ葉と [いづれ] まさ [まさると]

萬葉廿 第十 きとゆゟが玉がきのうへえしふる雪ハ花のまがふ [いづれ] 六帖 うゑし たが [へると]

土佐 日記 霜髪の雪といえべの白波と [いづれ] まさ [まさると] 〓たま川 たる波

拾遺 八百日ゆく濱のまさ砂とこが恋と [いづれ] おふ まさるしら浪 [まさると] 〓おきつ川 浪ち

右の件秋あれ。あふいづれまでいづれバ。あふるまさるまでく結ぶべき定まりなるを。なといれぞ。ことく結びるハ。いとくめづらし。紀結びあるにちまバいづれの本かと見あもまま古いの文。一本まハかと。一本まハあらとてあると。これを見べぞ。なと何るが正しきゟまいふべかまど。ると思るまハ。猶ことくあるて見あるがおろし。又萬葉万葉あるハ。ただしふ志字まて里の字きしとあられぞ。なと何るハ甘くにむがてくおしれて。右の言などを

考へ見るべき也。或ハとも出るハとに撰集あらぬなり。みな一首とのみ出せり。
こまぎりて思ふに。撰集にはよき人をかしらを加へらし。後に歌を改めつるよ
うしそ。かの集をバ人の手を入ざる本に。思ふるにしうたびひがし。一つ
なるくにけむのまゝ出て侍ハ見るなり。
の友様也。此様ハ。其の中に後撰集と源氏物語との言をのせえて。其の人
のうしなふ事あるなれバ。殊に注するまおなく引出せり。

又

新千十四 交名　うのむのうきみがくれにほそぎすぢが結びぬと いづれ ねどへ ぬ

五社百首 後鳥羽　おちたぎつ川瀬のうちとの岩の苔夕がはのかくへに いづれ 流せまし

これらをいづれといへれバ。様へ鞍る事なきしてそいふべきなれ。

ぬと結びしと結べるハ。上の件とほじ様也。

〇又一首

今二　夜のよに月まつかどのまゝもさくらに岩ながる流れ いく むすびし つ

新六　夜ら川音をまくらにきゝつゝや伏見の苗を いく よのこし つ

同九　みやこには秋と為ぞ立そめしよどの川霧 いく よへぬて つ

新勅一 式子内親王　高砂の尾上にきこえ鳴かまよそみやこのまき いく へかまきみ ぬ

全四　浅茅原雨の夜路に明暮に いく よ麻見 ぬ 治戸の笠る

新四　しきたへの枕のちりにまどろまで夜ごとの檜の葉に いく 秋うき つ 寄ね玉づさ

同七　年経ぬる宿の志しるしりん いく よふなり ぬ 不結ふなみ

拾衣　思ふあしあるらふとなしに いく つり様をりつる ぬ うとね川波

玉葉　船出して いく うふなり ぬ 夜て見て山の名をうらうかぞきふける

新二　いく うせ結まふるうを流らしき ぬ わりまも思へみよし結し花

同十四　いく 名かりえゆく月ともへぞてき ぬ 数名しオハよ結の名れき

右のかざしいくしいつをバつらぬると結ぶべき格なし。つと
むすび。ぬと結ぶること。上の詞まへとはしきるの裏格なり。
此格を後世にとおもくよみあやまる文

元永集
されバとて萩の下葉も色づきぬおくまで秋ハいづくまで来ぬ

これぞこのほど格なれ

本末にゆづる格

下ハや何等けてふをるをおさまへて結びの詞を。本末にゆづる
つ下してゆづる格也。

新一
卯の花の身のしらがともおもひぞとしも[や]むかしの月にちかひや

旧十三
面影乃かはらで月ぞやどりける[や]むかしの袖の涙にうかぶ。
此二首ハ月やいかぬるとむかしの袖ぬるゝ涙の心をうけて。
いふ本末結一首の文ぞ。むかしといふ詞ハこえてのと結ぶりの
てそのこともうちかへてぞやの結びを
本末にゆづりてむすびけりの格也

旧十八
君が代ハいつまでとかばかり[なに]を上の結乃かくしてまでハ。
これハちよ迄一つくの事にかゝるよりかぎりていつまでバ
いふを本末にて。君が代はおもひバいつを上の結ませんその上の
結まりまでのをるかをといふ事も何の結びをば本末に
の結のことをゆくまでのとまるを上のり同じ

拾遺古今墨
おのづから[いかに]結しよの美称で流しき人はその月ハへもせいまき
これもたえ迄一よりく本格のよめるとをおしいかに結し
んといふを本末にて第二の句のまた一首のことをこめていかにの結びをも
おにゆづりてのとまる
ころ上の詞なしとおなじ

続拾二 定家
しひてなほ誰かしらせしや花のひもまた[いく]かの程をとしさくらん

これハ古今春下ぬさとつてぞしひてさそふ年の内にハいくかとかぞへよ。いくかとかぞへていくかといふ詞によりて。さて本句のことをあとへてのしておかり。本もいくかとといふ詞にていくかのてにをはハかくのごとを。今ハ本歌なほゆづりてとのといひてつれど。いくかとはいはじとやすくいふてきをふくめりさてとぢめのらんなほ二の句のやの結びなり。いくの結びはハいはれ。よくせずバまぎれぬべし

新続古十三 順徳院
いのち[やハ]あだなる花の露またしえたのまて菊を惜かれる身なきを

これハ古今恋二いのちやハなぞは露のあだものをあふにしかへばをしからなくに。といふ哥本歌にてよませ給へりあふにかへをしからなくにをしきと此下句てかくかへたまへるのといふ詞をバ本歌なり大かたへいひかくしたまへることをぬくなれて。いかでの

○次のぬし本哥に出づる語ハその本歌をしらでハてにをはきゝかがたかるべし。又今おぼろなる人のよむべき物ならじ。けしからずバいかかくれたる事きなるらんかし。

てにをは不調哥 三代集の内をむねとはいへど。撰集の外ハおほくもらしつ

[き]

古十
ほとゝぎすまちしかやまぢとおもし[き]
上りぞのや何ぞ哉てふをうけてハきとはむすぶ一首のくゝりと きとはむすべるなど。八代集の中に此[き]ぞ

新勅十八
物思ふ心のうちにかくるゝを見ておきて涙のみぞこれのまとなき[き]

玉二
いかにせんゆかりやかるとしのびつゝひとやおなそぬへ[き]

同十
ちぎりしとよしとぬれまぬはゆふべまたにハなしにおもひな[き]

同十二
人やかはとがちからやれまさるたえなともそでのうら[き]

同十七
行きかへり河も命をもはし美濃よしのよきこゝろ身さへえかね[き]

風二　何しるき音は花さく　みべのまやふむぐるしのてゐものどけき　き

月十三　かぞへたれ人の心の色やあめ　〜〜みんとそれぞきのふ〜〜とあ　き

月十七　人乃世をそ久〜とらあも一さ花の美ちらすてさも猶もあ　き

志き

秋云　をぢすまて山とにの〜八よこのそふり猶る松さへ美乃〜さび　志き

此詞ハ新古今の中秋ぞうの部のうちきたゝとやうにつ乃。殘よ志のもよろしくハ行〜ねどうしくハて実はのそのハざるあるそもきねべし。上よそのや行をの縁ぞて。しきしまれ〜ハ八代集の中にそ代一首のみし。その屋の十三代集ともおもふ風雅よのしきてゝ。かのこゝろハ一首とゐて〜ゞ。

五三　文山乃岳が根きよく〜ゐ落て〜うゝ〜ゐ猶のそろとちぐ　志き

月　吹風秋作ゐなる秋を秋きぬとおぞつくばゐ神ふそぐ　志き

月十七　山里まさる面乗ぢ秋のきりぐ〜もたえぐ〜ゐる梨もさび　志き

月十七　にのまをしめ無ふ乗ぢ秋をかそ〜ねどそふ三ぢ乃もて一当のこゝひ　志き

風十七　ゐ〜〜ゐぶ〜〜山ぢの夕やゝゐ秋ゐりさにゐ〜ゐるもて。さぐ　志き

月云　夕日ゐつる柳のもゐ乃秋風ゐて〜ゐ〜ゐ秋ゐのてゐもさび　志き

月十三　人〜そにのまゐさへゐひて〜ゐもゐばゐごゐゐゐんそれもゐゐ　志き

月　れゐふ人ゐひの月をいふ乃るや　つゐゐもにゐぬゐかゐ　志き

月十六　ゐゐゐづむ岩ぢ新潟のゐぢ山まきゐ〜ゐれぬゐぢ秋ゐ　志き

月十七　ゐゐをぞてゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐふ牧ゐのゐ〜ゐぬゐぢ秋ふ〜ゐ。ゐゐ　志き

おゐよ秋上ゐ〜ぞのゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ伊ゐ秋ゐ秋ゐくゐ〜ゐ。さゐゐゐゐゐ

秋び〜ゐ〜ゐ秋。ゐ一代集ぢ中ゐ載ゐゐゐゐのめ〜ゐ。ゐくゐゐ

の世界ぢ用ゐゐ。ゐ集風雅ゐ〜のゐおゐ〜ゐ。ゐ他の集ゐは

たゞ三首なゝでは歌きを以て。此板のようゝ〜かゝぬるをさゝ
ゝべゝ。撰集のかゝ[illegible]ハ古〜ハ[illegible]
のゝやさゝ〜きんこづ[illegible]ハ[illegible]玉葉風雅[illegible]は
なれ伴の[illegible]とのかゝ[illegible]をゆゝどさのゝハうゝそゝそぶき
つゝさゝべゝ此二つの[illegible]ハ。えゝといゝをゝびゝでゝ〜〜いやゝ〜に[illegible]
[illegible]ゝ中にてふをもはゝそのゝぞゝるもいゝ〜れゝきゝて。こゝろゝて
も知べゝ。御ふ後世の人。此玉葉風雅をバ風雅[illegible]ゝ〜つゝ
ふゝひゝるゝ〜。みゝびゝうゝ〜ゝみいゝづゝるゝゝ。此二つの[illegible]はゝゝ〜。その
や何〜かゝらぎゝて。きゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハいゝふゝぞゝや。て
ふをはを西さん人ゝ。此格ゆゝゝ〜ゝよゝむゝべゝ〜ゝゝ。[illegible]ゝ[illegible]べゝ〜ゝのゝ[illegible]ぬ
琴の[illegible]ゝ〜ゝ[illegible]ゝ〜ゝ。ゝ[illegible]ゝ〜ゝ[illegible]ゝ〜ゝ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぞ

元暦 [illegible] ぞ [illegible]

[illegible] このまよりぞ [illegible]

[illegible] 文[illegible] [illegible] ぞ [illegible]

[illegible] 加[illegible] [illegible] ぞ [illegible]

[illegible] 件のぞ [illegible]

[illegible] いぞ [illegible] 秋風 ぞ [illegible]

[illegible] 山を [illegible] ぞ [illegible] 秋乃 [illegible]

詠歌 十六 [illegible] 山のふもとを [illegible] ぞ [illegible]

詠歌 十七 [illegible] 秋やと山の風 ぞ [illegible]

拾 十一 [illegible] や [illegible]

同 十七 [illegible]

後拾 九 [illegible] や [illegible]

いせ物語

こゝも　や　このもとわかあやめ　紙のぞきつゝ　月ゆきまでゝ　まさりがほなき

ゆこのゝらの　月ハ　ものゝ　中に　たの　二首ハ　やの　結びとゝ　のゝ　ことゝ

やこのゝらの　ふはる　やの　結びとゝ　のゝ　ことゝ　やの　結を　考へ

若草集

ゝゝ　ゝ　ゝ　

清輔 十五 おもしろきを いろふ うすもの

けいこやうやうひえびしてをんなこそほくくとうやきをりと肴くう

てゆきをくくとくくびすんある

うぐいすの歌

同 六 ちそやどき本第をいるハのくくねぎそげくく くとくとゆあるくの歌

同 十四 みやこを ぐまちをぬをつまぐるやをきえぬゆゆたりくるを

新撰官 六 やくるうぐやのるくぐをしをうくをひてゆるをよ源き老の稚ぐえん ふ

同 十七 つちぐをとるゆきくくをみよくくけくをのくをきつ ぬくくくるくを

たのをぐしくるぐをくくぐをくくぐ

ゆるくくるゆぐくくるを

拾 六 稚ゆ ろ ぐ紙くをぬ ふれ のくゆ乃をぐくふのくハあをせぐくくをん

上をゆるぐくるひてゆるをくくをたくるハくのをぐゆるぐくくるくを稚ぐ

ぐくゆのゆるをるくくハ上をゆるをぐくくをくをゆ

同 十二 をがくをくるくくゆくくくるる く くも むをぐくくを紙をくくをとかくをのを

ゆるくくをくくくくトをかくくくくくくを結ぐくくをぐをくくをくくゆ

かくをくぐをるくぐ上をゆるくれぐくくるくくをくくをくくをくくゆ

金 八 を くくくを 妹をくくくをえや稚痛くくくくのくくくを紙くくくくくくを

をくくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]八　ちぬ人をまつ川　紅風[illegible]

[illegible]六　夕ぐれ[illegible]

[illegible]三　萩の葉に[illegible]

[illegible]十　いづ[illegible]

[illegible]十三　[illegible]

[illegible]十二　[illegible]

[illegible]十三　こまやさばら[illegible]

[illegible]の[illegible]と上[illegible]

[illegible]

一本ふてふをはを写し誤る事

[illegible]八代[illegible]

[illegible]

[illegible]三　はるぎに人まつ[illegible]

[illegible]云　[illegible]

[illegible]十一　[illegible]

[illegible]十三　[illegible]

[illegible]十四　[illegible]

[illegible]十七　[illegible]

月十九　秋の雲に素月を入れ乃年をへゝ　ぞ　ふ　ゐ　の　ひ　よ　ゝ　[そ]　な　く

（此句結句のえりゞ　ぞ　ま　ゐ　の　本　は　ハ　皆　ぞ　ゝ　い　ひ　ど　も　上　ゝ　ま　ぞ　ゝ　い　へ
ま　ば　ぞ　ゝ　そ　ハ　ゝ　の　ま　ば　六　枝　一　本　に　も　ゝ　ま　ゝ　を　見　ま　べ　ゝ　此　句　は　て　ま　そ　え　枝　後　の　こ
ま　ま　ま　ま　ま　ま　も）

月　ゝ　ま　に　ま　ハ　人　ま　ゝ　ま　ゝ　け　茶　の　ま　ぐ　ま　夜　を　ま　[う]　ま　ま　ま　ま　ゝ

後一　ゝ　ま　な　ぬ　ゝ　ま　を　ば　う　へ　ゝ　梅　花　か　ぞ　ま　ゝ　ゝ　ふ　ま　ハ　ざ　り　き　[る]

月二　ま　ゝ　ま　ゝ　ば　こ　が　ゝ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　[く]　と　山　法　ふ　ゝ　て

（此句井戸の白のまりゞ　今本ハ皆くといふを
侶うゝ古抵ゝ　ま　と　あ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

同十一　ものゝあふぎでうわ〳〵徒をぞ。雲やう〳〵と人[の]とがむる

同十二　石川は淵のいとゞみどりつくるをぞ。人〻まつといふる[る]

同十三　そかぎゝてたえんうちはるあり。うぐいすかむとさらん[ぞ]

同十七　うぐ人もなれるはあぐ[ぞ]ゆきぞ。ゝ〳〵ハぬ。

同　淵つ瀬ゝ〳〵それ白玉ぬみどりすん。ゝろやくせゝみ神[え]ゑちぬき。

同十九　かゝ衣ゝ川日をよそふきゝ人きゝ〳〵さだりは秋もこひゞ[を]

拾二　ふじ川の恒信手嘆ゝ卯ゝ忘をたゞきろ〳〵乃衣ゝを〳〵[ぞ]

同十六　とゝゝきゝ〳〵ちぞおと[ふ]佐ゝぎぞの刃をきゝろぞゝんちのゝゝて

同九　いなきゝじあゝたりくのゝ[ぬ]とゝ〳〵ハ拙ゝりひゝとゝ人とこそ見[き]

同十八　津のゝまいゝく田はゝりのいゝく成ゝ佐ゝきんを糸[ふ]えちゝん

同　はのふはゝりゝ白のゝゝくおゝと[へ]ぞもゝれ[を]班波の伊とぶふんぞ

同十五　ちひきゝばこひもきゝ。むぼこはきゝ人〻ゝつてとゝ[き]

後拾一　花ゝて[ぞ]身はゝこたゝとゝすゝ佐。ゝ長ハゝぶゝはゝりゝまゝゝゝバ

同七　出ゝでほゝもれのきゝ〳〵赤たゝえせで[ぞ]久ゝくよゝふへつゝろべき。

同十一　こゝりゝゝと人のゝゝろを忍ゝぐやゝゝゝきゝ凡[ぞ]ゝ〳〵[べきと]

同九　おゝひゝゝとゝとゝ乃ゝじとゝ乃ゝゝつきぞやゝとゝふゝそ鶯ゝれぬ[ゝ]

金一　山吹ゝ〳〵きゝゝ風をゝんあゝゝば八ゝきゝぐゝを[ぞ]ちゝゝぐゝ佐ん

同二　和ゝ花のゝゝ葉ゝ乃ゝぞ咲ぬゝバ春[と]ハゝのゝかゝるゝゝりゝ

同八　ゝゝと佐海乃ゝゝゝくゝぐふゝりゝれゝ佐ゝゝ〳〵[く]ゝゝぬゝゝゝひ弘

同　梅をゝ。そ恵べでいも[祢]いゝゝゝゝのりゝふのゝゝりゝゝゝが佐う那一

千一　さしぬ[やと]ちゝぬ山路よりのいる糸をバ乃きてるうらぶと

同云　浜ヶ戸の実勇の文をゝ四ふちかゝぶく月をまもかゆ[や]

同十　うゝきあ[く]程象代ぞ和むなきゝやの山はみのハまの風

同十九　ちゝぐゝ[き]をぬれよりふ尺月の影を猶ゝやどんべゝ

新一　陸みどり花もむゝ川ふかゝを[佐]ゆるゝふゝ雨ふる長はよの月

同七　忘が代ゝを久ゝかゝべ[し]ゝゝゝひや五十鈴の川の流きたしそで

同八　むきゝゝゝる家とゝゝとふ[た]きえ雪せで深よのゝゝ玉ゝたちづむ玉

同十文　文堂ゆくゝきしゝ山角の佐ゝ山まゝと立ゝ[ぞ]ふ[ふ]妹がちゝゝろを

山家八番集四ゝ出ゝ下句妹がをうすれて見やとゝ佐ゝ出されゝるれで
おりゝとあゝ方を空ゝかゝんと思ふ人もゝべゝれどゝゝ八ゝゝのゝび

同十六　かゝゝ衣ゝゝちかゝゝゝぬゝる長はよふいゝでゝ空乃いろをゝゝゝべ[き]

同十七　空を抜むゝかゝゝハいづゝ[と]ゝゝぬべゝ大木山ゝゝゝみよかゝきや

同十八　うゝ花をゝゝゝゝばあゝゝよゝ長ゝゝ乃美濃ゝゝつにゝゝかゝ[佐]ゝ

山佐ゝ一本は八佐と出あり
てゝ八佐ゝゝをゝゝやまれゝゝゝゝだゝ

○上件の詠いづれも。かゝゝゝにゝゝる本は方ゝて八。ゝゝゝ一首のて
ふをはゝゝのもずゝきハゝて。ゝゝゝ字ゝゝし。ゝて右のふ。新勅撰より下
つゝゝ十三代の集ゝゝ。てゝをゝゝ字ゝゝあやまゝゝゝゝあゝゝ純ゝ。そハ
今ハ皆ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ

○上の。一本にてゐをそをを字〜佐ら〜ゐの中に出せる。古今十九の「秋の野ゐ書あき糸のうとと
いつ〜ゐ当はてゐをはの〜。結句のもりげをぞとさるるきハ。上のあぞうりよりげまで。藤の
時ゐ。ゐ。て。ひげ糸のかひを伝ぞよとらふとし。結るきあぞそとらふ辞上ゐ五て。下に上ひ
あ〜あ〜。さハ生ひうゐつきやく〜を。左をかく〜ヒよみきん。右のぞ〜〜ゐるとれハ。
あぞの辞ハよりげまで〜かう〜て。その下へをゐぞるあふ。ぞりげ結てゐをて不調〜
行〜げ。ゐうをぞゐるかひよれ。あ〜〜とあらぞ。ゐるもあ〜やゐ〜〜ふゆの〜ゐる。もりげ
あ〜ゆゐを。ひげゐひのかひよのとゐつゐが糸の初ゐて。あぞハをゐをとゐが見ゐる他者の初し。